神戸工業試験場

航空機部品検査

航空宇宙ビジネス 88

フロンティアへの挑戦

エアバス向け需要狙う

エンジン周辺市場開拓

神戸工業試験場（神戸市兵庫区、鶴井昌徹社長）は、検査分野で航空機部品を支えている。航空・宇宙産業の品質管理規格「JISQ9100」をはじめ、材料や部品の試験に関するさまざまな規格の認証を取得済み。欧州では仏国営研究機関のCetim（セティム）と協力し、欧エアバス向けの需要を狙う。国内では熱分析を手がける企業を子会社化するなど、新たな事業領域の創出も目指している。

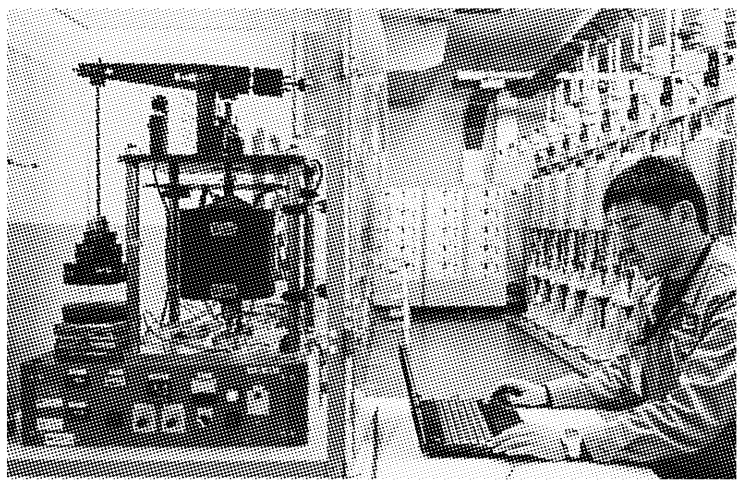
（神戸・石宮由紀子）

□ □

仏の機関と提携

神戸工業試験場の前身となる鶴井商店は1947年に神戸市長田区で創業した。以降、三菱重工業関連の仕事を多く手がけて、発電プラントのタービンに関わる検査業務も担う。タービンは発電プラントだけでなく、航空機にも使われる。三菱重工の事業展開に伴い80年以降、航空機部品関連の検査業務もおのずと手がけていった。

各種認証の取得に力を入れていったのは、05年のJISQ9100取得がきっかけ。翌06年に国内で初めて民間航空機分野の特殊工程管理の国際認証「Nadcap（ナドキャップ）」の材料試験所（MTL）として認定を得た。Nadcap－4426認定事業者に対応した国内の試験所設置への要求が高まり、IHIなどの支援の下で実現し、現在の播磨事業所（兵庫県播磨町）となった。15年にボーイングからD1（MTL）、17年にNadcap非金属材料試験（NMMT）の認定も取得した。



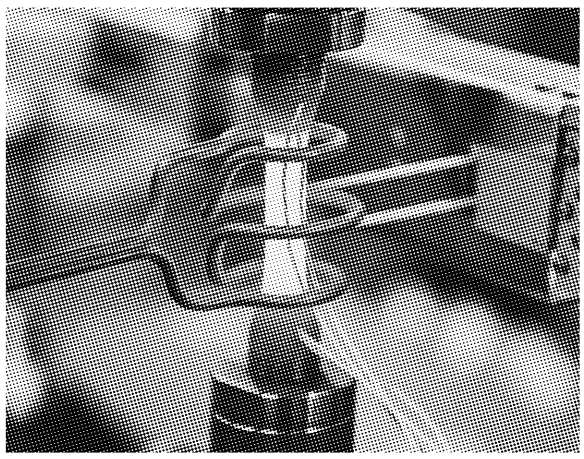
余寿命評価に活用する自社開発のミニチュアクリープ試験機

海外機関と連携し、新たな市場の開拓にも挑戦している。20年に仏セティムと協力合意書を結んだ。セティムとは17年から提携していたが、欧エアバスに照準を合わせた展開を航空事業に加えていきたい思惑がある。現状について鶴井宣仁副社長は「セティムを通じて情報収集をしているところ」と話す。24年には航空機エンジン大手の仏サフランの材料系の認証を一部取得している。

熱分析企業買収

神戸工業試験場が材料の試験・検査のうち、特に注力していきたいのはエンジン回り。エンジン部品は燃費向上を目指して高温下の使用が想定されるため、熱分析は重要な要素になる。従来の検査業務は引っ張り強度試験などに強みがあるものの、熱分析については不十分。不足を補う形で24年12月、日本サーマル・コンサルティング（神戸市兵庫区）を買収した。

同社の熱分析は、「より現場の環境に近い状態で、データを取っていることに特徴がある」（鶴井副社長）という。真空でない状態下にある1500度C以上の高温な電気炉に材料片を入れて、試験を行っている。真空状態でないと試験片が酸化しやすいが、電気炉を特注品にすることで対応している。



航空宇宙分野に用いられる金属材料の高温大気中疲労試験

航空産業はコロナ禍によって低迷した。神戸工業試験場もコロナ禍で航空事業の売り上げが減少。他部門が健闘して持ちこたえてきた。市場の低迷でプレーヤーの数も絞られてきたが、今後は成長する兆しを見せている。鶴井副社長は、「このチャンスを生かし、しっかりと市場を取り込みたい」と意気込む。

無断転載・複写禁止 ㈱日刊工業新聞社